

“... [All of] you became so good and kind even to a wandering stranger because you are the worshipers of true God and the humble followers of Christ.”

--- *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima, p.189*

あの恩人たちがさすらいの異邦人に対してさえあれほどやさしく親切であるのは、真の神を礼拝する人々だからであり、つつましくキリストに従う人々だからであります。『新島襄全集 10』p.209

新島が帰国後にハーディー夫妻へ宛てた手紙の一節です。
アメリカにいた新島には、すべてのことが驚きでした。進んだ文明や自由な空気、男女が一緒に食卓を囲むことでさえ、武士として日本に生まれ育った新島にとっては初めての体験でした。そして何よりも心動いたのは、遠い東洋の国から船で流れ着いた青年に、ハーディー夫妻をはじめとする方々が、家族のように手を差し伸べてくださったことでした。この人たちはみなプロテスタント教会の会衆派の人達で、新島は彼らを通じてキリスト教に触れたのでした。

恩人たちへの感謝の気持ちを原点に、人ひとりを大切に作る学校として同社はスタートしました。

それから百五十年経とうとしています。いいことも悪いこともありました。が、ここ数年はコロナ禍、昨年より戦禍と胸の痛むニュースばかりです。一方で、目の前の小学生を見ていますとフードドライブやチャリティーイベント、学生もボランティア活動に励むなど、キリスト教がとくに大切にしている弱い者、小さい者へと視点を移していることが分かります。困っている人に手を差し伸べるというのは、大人になるほど難しいことだと感じますが、若い人たちはいとも簡単にやっつてのけます。なんと清々しいことでしょう。

さらに歳を重ねて、この説明しがたい数年間を振り返った時に、キリスト教主義学校で働いていたことに意味があったと思える、そういう毎日でありたいです。

同志社国際学院初等部教諭

あおた
青田 しのぶ
忍